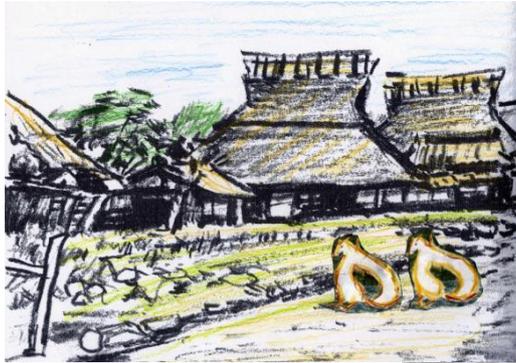


唐丹の民話・9話「片川地区」

夢枕にたつた



稲荷大明神

平成19年3月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目 次

—夢枕にたった稲荷大明神—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. つきまとう“獣”らしきもの	3
2. 夢枕にたった獣は	3
3. 氏神様は“稲荷大明神”	4
4. 稲荷神 (参考)	5
5. 稲荷神と狐 (参考)	5
6. 信仰 (参考)	5

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「**夢枕にたった稲荷大明神**」は、釜石民話第1集「**稲荷大明神**」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

大正15年2月25日は、この話をしたおばあさんがお嫁にきた日です。嫁に来て田畑に出て働き、夕方仕事を終えて、手足を、洗っていると必ず二匹の猫よりも小さな動物がそばに来て、チョココンと立って見ているのです。

井戸に行けば井戸に、風呂に行けば風呂にチョココンと立っています。追い払うわけでもないので、毎日、同じようについて歩き回ります。

今日はどうかなあと思っていたある夜、夢枕にたって、その小動物は「稲荷大明神だ」というので、早速、近くの神社に行き、拝んでもらったところ「家の守り神として祈ってもらいたい」と言うことなので、九のつく日として供物を供え、家の神様として祈っているとのことでした。

秋鮭が鮭川にのぼる頃、十一月二十日には、この鮭川でとれる雄鮭と雌鮭を供えて、お祭りをするならわしになっているので、この稲荷大明神もいっしょにおまつりをしているそうです。

原文・おしまい

夢枕にたった稲荷大明神

1. つきまとう“獣”らしきもの

大正15年2月15日は、この家のおばあさんが嫁にきた日で、その次ぎの日から、田や畑に出て一生懸命働いていました。



(おばあさんの家と2匹の獣?)

いつも、ついて回るので、不思議で気味が悪いが、追い払うわけにもいかなくなりました。

ある日、仕事を終えて、小川で手や足を洗っていると、そばに猫よりも小さい、獣らしいものが2匹、チョコンと立っていました。

おばあさんが、家に帰り井戸に行けば井戸に、風呂に行けば風呂ところにチョコンと立っています。

2. 夢枕に立った獣は

これが、毎日続くのでした。おばあさんは、明日は、どうか思いながら床に就いたある9日の晩のことでした。

あの小さな“獣らしきもの”が夢枕に立って、「稲荷大明神だ」と言いました。

びっくりしたおばあさんは、つぎの朝早く起きて、近くの神社に行き、わけを話して拝んでもらいました。

神主は、「家の守り神として祀ってもらいたい」と、言っていると、おつげをだしました。



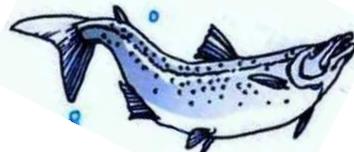
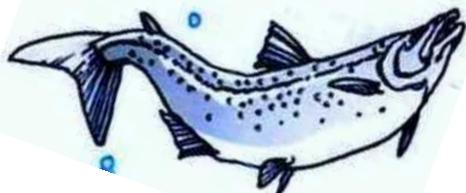
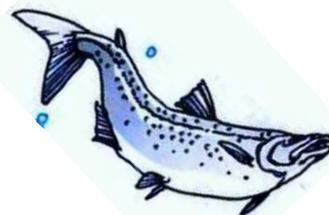
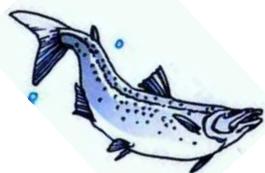
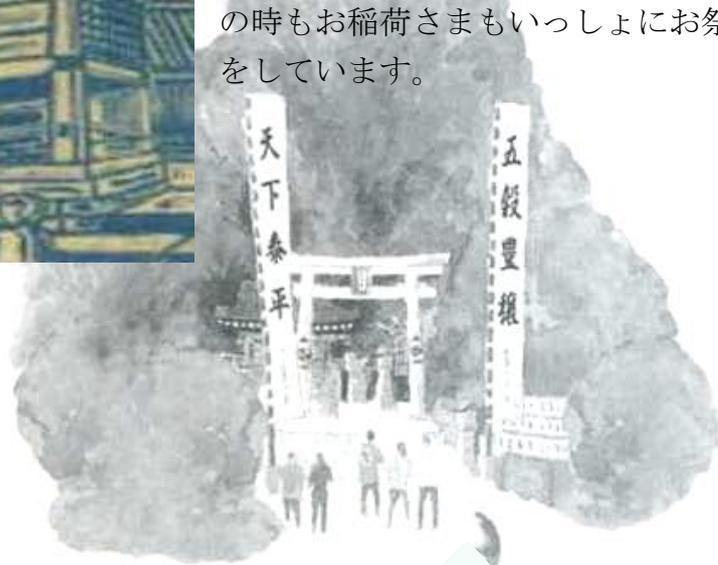
(夢枕にたった獣らしきもの)

3. 氏神様は“稲荷大明神”

早速、このおばあさんの家では、稲荷大明神を氏神様として祀り、9のつく日は、ご縁日として供物を供え、拝んでいます。



この村では、秋鮭が鮭川にのぼる頃の十一月二十日には、この鮭川で取れた雄鮭と雌鮭を供えて、お祭りをするならわしになっています。この時もお稲荷さまもいっしょにお祭りをしています。



物語・おしまい

4. 稲荷神（参考）

稲荷神(いなりのかみ、いなりしん)は、日本の神。稲荷大明神(いなりだいみょうじん)ともいい、お稲荷様・お稲荷さんの名で親しまれる。

稲荷神は、宇迦之御魂神(うかのみたま。倉稲魂命とも書く)などの穀物の神の尊称であり、宇迦之御魂神の他、豊宇気毘売命(とようけびめ)、保食神(うけもち)、大宜都比売神(おおげつひめ)、若宇迦売神(わかうかめ)、御饌津神(みつけ)などとされている。

稲荷神は本来穀物・農業の神であるが、広く産業全般の神として信仰されている。稲荷神を祀る神社を稲荷神社という。

日本にある稲荷神社は3万社とも4万社とも言われており、屋敷神として企業のビルの屋上や工場の敷地内などに祀られているものまで入れると稲荷神を祀る社は無数と言って良いほどの数になる。

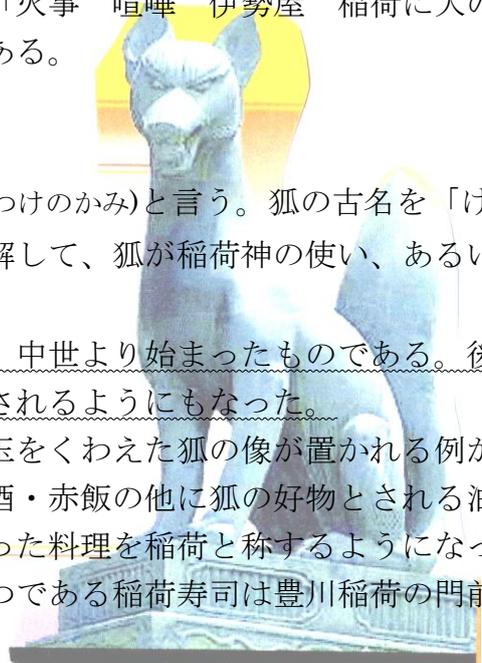
江戸時代には、江戸に多い物として「火事 喧嘩 伊勢屋 稲荷に犬の糞」というはやり言葉があったほどである。

5. 稲荷神と狐（参考）

宇迦之御魂神は別名「御饌津神」(みつけのかみ)と言う。狐の古名を「けつ」と言い、御饌津神を「三狐神」と解して、狐が稲荷神の使い、あるいは眷属けんぞくであるとされた。

狐を稲荷神の使いとする民間信仰は、中世より始まったものである。後に、狐が稲荷神そのものであると誤解されるようになった。

稲荷神社の前には狛犬の代わりに宝玉をくわえた狐の像が置かれる例が多い。他の祭神とは違い稲荷神には神酒・赤飯の他に狐の好物とされる油揚げが供えられ、ここから油揚げを使った料理を稲荷と称するようになった。稲荷の名が付く代表的な料理の一つである稲荷寿司は豊川稲荷の門前で発祥した。



6. 信仰（参考）

稲荷神社では、2月の最初の午の日に「初午祭」が行われる。これは、伏見稲荷神社の祭神が降りたのが和銅4年（711年）2月の初午であったからと言われる。

稲荷神には大別して2系統あり、片方は伏見稲荷大社などに祀られる稲荷神（豊川稲荷、篠村八幡宮、祐徳稲荷神社等）。もう一つは狐神として祀られ庶民の間から発祥した稲荷神である。

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より一部抜粋引用
(参考)の項おわり

◎釜石の民話・第1集：稲荷大明神の話

○話し手：不詳

○聴き手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：留畑孝子／片川地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：同上。切り絵等：同下

●校正指導者：新沼裕／本郷地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●再話完成：平成19年3月